

ちまた

全国で2300カ所を
超えるという「こども食
堂」、この広がりには岡山
県内でも例外ではない。
私が学生たちと子どもた
ちの居場所を始めた約3
年前には、岡山県内にこ
ども食堂という取り組み
はなかった。急速な広が
りは、子どもたちへの思
い、さらには地域社会全
体への危機感の表れとも
考えられる。

山陽新聞でも、こども
食堂については何度も取
り上げられてきた。最近
では、8月17日、24日、
そして31日付朝刊に、湯
浅誠さんによる「未来を
育む こども食堂の今」
という連載記事が掲載さ
れた。こども食堂への関
心が高まる中で、多様な
関わりを紹介するもので
もあり、とても意義のあ
る企画であると思う。特
に企業などの関わりの事

山陽新聞を「読んで」

川崎医療福祉大講師 直島克樹



こども食堂「始縁」の場に

例紹介ともなっており、
今後は岡山という地域で
の活動も紹介し、さまざま
まな主体による協働を後
押ししてもらいたい。

こども食堂は運営の持
ている。その意味で、九
響を受けているのが子
取り組みをシリーズと
して山陽新聞において
取り上げるなど、子ど
もを中心とした地域の
居場所を共に考えてい
てもらいたい。その
「当たり前」を保障し
ていく可能性を秘めて
いる。「縁」が始まり、
の権利保障を促す活動
の一層の契機となりう

継続可能性など、いまだ課
題は多くあるが、子ども
から高齢者まであらゆる
人にとって参加が可能
な場所としても展開して
きている。居場所の意味
はそこを訪れる一人ひと
り違っていい。大切な
のは多様性を受け入れ、
必要によっては互いに
支え合える関係性を築き
上げていくことだと考え

リンクさせた実態調査を
実施した。その調査にお
いて、例えば、小学5年
生の子どもの約4人に1
人が朝食を一人ないし子
どもだけで食べており、
また、子ども全体の約5
人に1人の子どもがひと
りぼっちで寂しい気持ち
を感じると答えている。

る場が地域にあるこ
とは、「支援」の前提
であり、福祉的にもさ
らには教育的にも意義
が大きい。そして、こ
のような場があること
が、そもそも子どもの
権利の保障でもあると
いう認識を社会も持た
ねばならない。

今後は岡山県内の各
こども食堂や、さらに

「山陽新聞を
読んで」は月2回、
日曜日に掲載しま
す。